慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シェリーにおける神の問題
Sub Title	Theological problems in Shelley
Author	瀬下, 良夫(Sejimo, Yoshio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1956
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.6, (1956. 12) ,p.102- 114
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00060001-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シェリーにおける神の問題

瀬下良夫

「実際に神の存在を感じられる人たちは当然神を信じる権利があります。彼等は感じられないものを憐むでしょうし、ぼく自身をも憐むことでしょう。しかし神の存在を感じられるまで、ぼくはそれに代るもの、理性で満足するよりほかはありません。」

手紙（一八一一年秋）のなかの言葉である。無神論にはちがいないが、条件がついている。それでは彼は最後まで「感じ」なかったのか。感じたのである。しかし感じた神がちがつていた。彼が否定しようとして努力した神とは異なつた神が、否定された神のそのすぐ裏に姿を現わしてくるのである。そして彼自身はできるだけ神とよぶことをさけたある一つのものが、必然（Necessity）石の石たる力（stony power of stone）見えぬ力（some unseen Power）美の精神（Spirit of Beauty）荘厳なる至上の美（awful Loveliness）無限永遠不易なるもの（the infinite, the eternal, the one）というような様々な姿となつて、最後まで彼の内部をさまよつていた。

*

はじめからはじめよう。シェリーが神に関して公然と提示した最初の意見は、「無神論の必然性」（*The Necessity of Atheism.* 一八一一年。十八歳。この七頁の小冊子のために在学わずか六カ月でオックスフォードから追放されたのは周知の通り）である。後でのべるようにこの頃のシェリーに神の概念が全然なかつたわけではない。しかしここで彼が対象とし且つ全面的に否定しているのは主としてキリスト教の神である（理神論（アテイズム）に対する疑惑もでているが、当面の敵は啓示の神である）。これには事情がある。

「論理の糸をたぐつてゆくうちに、私たちは聖書が信用できなくなつてきました。……自分でもおどろいたのですが、私たちの見るところでは、神が存在するという証明はみな不完全なものばかりでした。」（父宛の手紙）。これがキリスト教に対する理論的反撥であつた。しかしこのほかに彼にとつてはおそらくはもつと切実な感情的な反撥があつた。というのは彼のスケプティックな態度のために愛していた従妹 Harriet Grove がその父から交際を禁止されたのである。「ぼくは誓う。ぼくは断じて不寛容（イントレランス）を許すまい。ぼくはこの悪魔をたたきつぶし、こいつを生れ故郷の地獄へ投げ込み、二度とたてないようにしてやりたい。そして完全な普遍的な寛容の精神を確立するのだ。」「ぼくは不寛容をたたきつぶす。少なくともそれをやつてみる。もし失敗したとしても、このような試みはやつただけでもすばらしいことではないか。」（友人 Hogg 宛）。こうしてさしあたりは、キリスト教とその神が否定の目標にえらばれる。

論証は三段階にわけて行われる。最初に彼は冒頭の言葉にもあつたように、神を感覚したものがその存在を信ずることを認める。しかしこれは第三の段階において事実として否定されることになる。第二に、理性は神の存在をみとめないと断ずる。この場合彼は第一原因というようなものを考えていない。宇宙が創造されたという証明が行われないかぎり、「われわれは宇宙が永遠から永遠へつながるものと考える方が理性にかなつている。」「宇宙を創造しうる存在を考えるよりは宇宙が永遠から存在していると考える方が容易である。」第三に、神を体験したというものがあつても、その体験した神が、信じるものには善き報いをあたえ、信じないものには罰を加えるというような神ならば、そのような神を体験したなどというのは全くの欺瞞だとして否定する。ここで第一の、感覚したものにとつては神は存在するという命題が同時に否定されたことになる。したがつて「精神は神の存在を信じることができない。」そして最後にQ・E・Dとつけくわえて如何にも自信あり気である。

シェリーの思想を嫌う、または黙殺する人にとつてはこの小論文は経験論にささえられた単純な論理が不遜な反宗教感情と結びついたものにすぎないとみられるであろうが、このことは逆にこれが少年らしい単純な、妥協をいさぎよしとしない、したがつて誠実な論証であることを語つている。その意味で、内容はとるにたりないにせよ、彼の生涯を通じての反抗の精神史の最初の一章として確認しておかねばなるまい。

The Necessity of Atheism は匿名で印刷されたが、その匿名は Atheist となつている。しかしそれには「証拠なきために」という肩書がついている。またすでにのべたように、「神を感覚したものにとつては神は存在する」ことがいちおう承認されている。このことは最初の手紙の言葉と同様に、神を否定したその裏に別な神を発見したというシェリーの心理につながつている。シェリーにとつては二種類の神がある。その一つを彼は否定し去つた。少なくとも否定し去つたと信じている。もう一つの神とはなにか。それはこの前後にかかれた手紙のなかにうかがえる。

「〝宇宙の魂、宇宙の作用原理〟これを信じないわけにはゆかない。……〝一切は巨大な全体の一部にすぎない〟(Pope) という言葉はぼくには単なる詩的表現以上のものに思われる。」

「ぼくは神——第一原因の存在を証明できるような気がする。唯物論者にきいてみよう。宇宙は如何にして生じたかと。唯物論者は答えるだろう。偶然によつて。それはどんな偶然なのだ。スピノーザの言葉によつてぼくが答えてみよう。〝無数のアトムが永遠から空間に浮遊していた。その一つが偶然軌道からそれ、他のアトムを吸引して重力の原理を、そしてその結果として宇宙を構成した。〟この変化、この偶然をもたらしたのは何が原因なのか。……これこそ原因、第一原因なのではないか。この第一原因こそ神なのではないか。」

さらにまた別の場所で彼は独特な形で神を論証しようとしている。

「それでは神とはなんでしよう。それは未知の原因、一切の存在の仮説的起原にあたえられた名称です。……あなたが考えておられる意味での神という言葉は宇宙と相似たものです。それは人間の魂がその肉体に対するごとき、植物に対する植物の力 (vegetative power to vegetables) のごとき、石における石の力 (stony power to stones) のごときものです。……魂のない人間とはなんでしよう。人間ではありません。植物の力のない植物とは、石の力のない石とはなんでしよう。これらがそれぞれ人間、植物、石の本質をなしているごとく、宇宙の本質をなすものは神です。この意味においてぼくは神を承認します。しかしそれは単に存在の存在する力 (existing power of existence) に対する同意語としてです。」

神の概念はいちおう認めていることになる。しかし宗教的な意味は全然ない。それどころかこの「存在する力」を一個の具形的存在

(Being)（理神論者の Person とほとんど同意であろう）としてははつきり否定している。それなくしては宇宙は存在しないというような具形的存在を承認しない。「神は宇宙の本質の別名」にすぎないのであつて、道徳（Virtue）や慈愛（Charity）や美（Loveliness）の根源とは考えられない。そのような本質の肉格化（personification）は詩としては美しいが、理性的には許しがたいのである。理性がわずかに承認しうるのはいわば乾燥した形のない哲学者の神にすぎない。

しかしこのような意味の神も次の段階ではやや性質をかえてくる。それは Locke からはじまつてフランス唯物論に到る影響のように思われる。特に D'Holback の *La System de la Nature* が著しい影響をあたえたらしい。おそらくこれは *Political Justice* とともに彼が最も熱心に熟読した書であつたろうし、ロックによつてめざまされた彼の哲学的思考を Berkeley, Spinoza の魅力にもかかわらず唯物論の方向へ大きくふみださせたものにちがいない。事実「女王マブ」（*Queen mab.* 一八一三年）は Godwin の無政府主義的共産主義の韻文化だが、その哲学的支柱としてドルバックの力をかりているのである。

Queen mab における宗教攻撃は激烈である。「神の名はあらゆる犯罪を神聖によつておおいかくすもの」であり、「一年として神の信仰から流れでた犯罪と悲惨によつて汚されなかつた年はない。」要するに神は権力者が権力を守るために、また権力の生む罪悪をおおいかくすために、人民の無智につけこんで創出した虚偽の概念であつて、このような神への信仰を強制する宗教は害毒と悲惨の根源である。

宗教よ！　多産の悪魔よ！
地上に悪鬼を、地獄に人間を、
天上に奴隷を、群集せしめるものよ！

このような宗教の存在する世界に対して、シェリーは宗教のない世界を空想的に展開する。そこは自然からうちすてられていた人間が自然に復帰し、合一し、自然のシンフォニーの合奏者の一人となつた世界である。そして新たな讃美の言葉は、

自然の精神よ！　すべてを満ちたらしめる力よ！

必然性よ！　世界の母よ！

である。ここに突如として「必然性」が現われてきた。シェリーは自然を機械論的立場からみ、純然たる物質の世界として把握している。そしてその背後によこたわるもの、彼のいわゆる「宇宙における知られたる事象の知られざる原因」をキリスト教的な神の概念とはつきりきりはなして、純然たる物質的なものとみ、それを必然性とよんでいるのである。したがつてそれは道徳とはなんらの内面的関係を有しないものである。「必然の理論によつてわれわれは宇宙には善も悪も存在しないこと、われわれはただわれわれの特有の存在の仕方にしたがつて、諸事象にこのような名称をあたえているにすぎないことを学ぶのである。」即ち「必然」は、善の根源であり、人間に善たるべきことを命令し、善きものに報い、悪しきものを罰するごとき神とは似ても似つかないものである。

人間の誤り生める神に似ず、御身は
祈りをも讃美をも愛をも求めぬ。
憎しみもいだかず、復讐も愛顧もない。
広大な世界に存在する一切は
御身の楽器にすぎない。お身はすべてを
かたよらぬ眼もてみる。

その理由はあきらかだ。

御身は人間の意識をもたぬ故に、
御身は人間の精神をもたぬ故に。

シェリーは創造する神を、賞罰を行う神を、肉格化された神を、そして彼の最も憎悪する不寛容を抹殺したと考えて、ほとんど手をうちたい気持なのである。このときほどドルバックの単純明快な機械論的唯物論の支えを力強く思つたことはないであろう。すべては明確に片付いたようにみえる。彼の心のなかにただよつて彼をなやます神の問題は洗いながされたようにみえる。しかし事実はそうで

はない。ドルバックが自然はそれ自身存在し、それ自身運動すると説いて第一原因の侵入を防いでいるにもかかわらず、シェリーはなおそこにわだかまりを残している。「必然」ですべてが解決しえたとは思えないのである。物質と物質の属性だけでは彼の心は安定しないのである。*Queen mab* の註のなかでいっている――「この否定は創造する神にのみ関連するものと理解されねばならない。宇宙と共に永遠に存在し普遍する精神という仮説は依然としてゆるがない。」

仮説といっているのは正直である。理性によって、または論証作用によって証明しえるまでは彼にとっては仮説である。しかしこれ以上に彼は論証できるのであろうか。理性によってはそのようなものはつかめないという考えは生れてきていないのであろうか。「感覚するものは神の存在を信じうる」というときの、あの感覚をたよりにすべき時機はまだこないのであろうか。

まだきていない。「理神論反論」(*A Refutation of Deism*) において彼は *Queen mab* で示した考え方をさらに展開させる。このかなり長い論文はキリスト教者と理神論者との対話という形式でかかれ、理神論者はキリスト教の害悪を激しく指摘してこれを否定するが、その反面、宇宙にはある企画 (Design) がみとめられ秩序、調和が存するから、企画者 (Designer) として神が存在しなければならないことを主張する。それに対してキリスト教者の口をかりてシェリーは次のように反論する。

宇宙における運動は最大から最小まですべてある法則の厳格な必然性に左右されるものであり、この法則は「知られたる結果の知られざる原因」であって、その本質は把握できない (incomprehensible) ものであるが、これ以外になんらかの仮説を導入することは全く余計なことで混乱をますばかりである。宇宙の体系は物質的な力によって支えられるものであり、物質の必然性こそ世界の支配者である。秩序、不秩序というようなことは諸現象が人間に有利であるか有害であるかによっていわれるにすぎない。また神の属性として全知 (Omniscience) 全能 (Omnipotence) 遍在 (Omnipresence) 無限 (Infinity) 不滅 (Immortality) 不可知性 (Incomprehensibility) 非物質性 (Immateriality) などがあげられているが、これらは神の属性どころか、人間に、有機体に特有な諸性質に対する否定形にすぎない。「神の存在は一個のキメラにほかならない。」

このようにして、理性による神の認識は不可能であって、神はただ啓示によってのみ接することができるのみであると主張し、人は

キリスト教者であるか無神論者であるか、という二者択一の立場におかれていると結ぶのである。ここにはもちろん逆説がある。このような論法で理神論者のごとき中間的立場はありえないことを指摘して、無神論の正しさを示そうとしているのである。

ここで次の二つの言葉が思いおこされる。「ぼくはかつては熱心な理神論者でした。しかしキリスト教者であったことは一度だってありません。」「無神論という言葉は論議を中止させるためにすぐもちだされる言葉で、愚かなものに恐怖をあたえ、聡明にして善良なるものを威嚇する描かれた悪魔だ。ぼくは迷信に対する嫌悪を表現するためにこの言葉を用いたのだ。不正にたちむかう騎士の籠手のようなものだ。」

これらの言葉は説明を要しないほど端的に Necessity of Atheism —— Queen mab —— A Refutation of Deism の線に現われた彼の考え方を語っている。教義(ドグマ)と不寛容を最悪の部分とするキリスト教の否定、それに対して疑いをもちながらかえって理性論的扮装によって妥協した中間的な理神論の否定である。こうして彼は無神論者として身構える。しかしこれによって彼の内部に一つの穴があいたのは事実である。そしてこの穴をみたす切実な要求が彼の心情にわだかまる。この一、二の間に「生命について」(On Life)「キリスト教論」(*Essay on Christianity*)「来世について」(*On A Future State*)というような長短の、しかし未完のものの多い散文をかいて執拗に神とそれに関連する問題について考えているのはそのためである。

「われわれは生き、動き、そして考える。しかしわれわれはわれわれ自身の起原と存在の創造者ではない。……われわれをとりかこんでいる一つの力(Power)がある。……われわれのもつ諸性質はわれわれよりも高い、全能の力に服従する奴隷にすぎない。この力こそ神である。」この力は「宇宙と共に永遠に存在し普遍する精神」と同一物であるが、ここで彼の無神論は壁にぶつかる。神を否定するためにかりてきた唯物論や理性論の役割はおわりかかっている。唯物論は自然、宇宙の解釈と説明にとどまって、自然を超えたものを認識するには役立たない。理性は理性を超える世界を否定することによって、逆に理性の限界にゆきついてしまった。「生命の原因はなにか。……われわれは深淵のふちにたっている。ここでは言葉がわれわれを見すてる。知られざる暗黒の深淵をみおろして目くらむのもあやしむにたりぬ。」もはや「感覚」にたよるほかはない。被知覚＝存在であるシェリーにとって、その知覚をえられれば閉鎖された観

念の世界が新しい世界へひらかれてゆくことになる。

*

「理想美讃歌」(*Hymn to the Intellectual Beauty* 1816) はこのような精神的段階の詩的表現である。彼はここで超自然的な神秘的な体験を次のように語つている。

いのちのさだめに深く思いをひそめてあるとき、
風にいざなわれ　生あるすべてもの　めざめて
鳥と花のたよりもたらす　その甘美のとき、
たちまちに御身の影わが上におちぬ。
われはさけび、恍惚として手をうちぬ。

これと同じ体験は「イスラムの反乱」(Revolt of Islam) の献詩にも語られる。

私はよくおぼえている。私の精神の眠りがうちこわされたときのことを。
みずみずしい五月のあけがた、かがやく草の上をあるき
私は泣いた。何故かは知らずに。

こういう神秘的な体験は体験できないものにとつては全くの謎であり、内的興奮の極点においておこる神聖な錯覚であるか、神経錯乱または妄想の一種であるか、倒錯的に記憶された夢であろうと考えたがるが、体験したものにとつては確実、真実なものなのだから信用するよりほかはない。ルソーの有名な体験やパスカルの火もそれであろうし、ワーズワースも同様な体験を語つている。この神秘的な瞬間はおそらくドストエフスキーが語つた癲癇の発作直前にあらわれる恍惚たる状態に似たものであつて、このとき自己と外界とをへだてていた障壁が奇蹟的にくずれ去り、内面と外面との区別が失われ、自己を超絶した犯しがたいあるものの一部であることを意識

し、自己の生命の本質を発見し、自己の一切をこのあるものの意志の実現のために投げいれなければならないと自覚し、自己の消滅否定を通じて新しい自己が肯定されるのであろう。

われはちかえり。わが一切の力をささげん。
御身と御身のもののために。

ところでこの体験は少年時代（イートンにいるとき、またはそのわずか前）におこつたものといわれている。何故いままでこれを語らなかつたのであろうか。いや必ずしも語らないわけではない。最も理性的であるときさえ、彼は「感覚したものは存在する」という命題をもちだして留保条件としている。しかしそれを自己の体験として語らなかつたのは、一切を理性によつて検証しなければいられない気持が強かつたからであり、ホッグが指摘している「無神論とはほどとおい、宗教的な迷信的な気質」を自分でも意識してそれに抵抗していたからであり、ついに理性によつて明らかにしえないものの存在をいやおうなしに意識しなければならなくなつたとき、この体験が新しい光をおびて彼の頭のなかによみがえつてきたのではなかろうか。そしてそれによつて Intellectual Beauty が単なる思弁や空想の結果ではないことを実証しようとしたのであろう。

Hymn to the Intellectual Beauty は、内部に論理と矛盾する要素をもちながら論理によつて自己を語ろうとし、数々の散文や手紙によつて苦闘したシェリーの精神史を僅か七節八十四行のうちにほぼ語りつくしたものである。ジィドがドストエフスキーについていつた口調を真似すれば、彼がもし詩人でなくて哲学者であつたら必ずその思想を整理して辻褄をつけようとしたにちがいない。そうすればわれわれは彼の最もすぐれた部分を見失つたであろうといえる。彼は詩人であつた。

シェリーの上におちかかつてきた影はなんの影なのか。第一節において彼はこれを「目にみえぬ力の厳かな影」(the awful shadow of some unseen Power) と感覚している。それは人間の間をただよい、時おり人間の心を訪れるものであり、その美しさの故にしたわしく、その神秘のゆえになおいつそうしたわしいものである。しかしこの神秘の影は第二節においてさらにはつきり「美の精神」(Spirit of Beauty) として、人間の思想と形とを浄化して美の色をなげかけるものとして意識される。しかしこれは決して人間の上に

常住しない。それは何故であろうか。何故に人間の上からきえさつて、人間を「空虚にして荒涼たる暗い涙の谷」にうちすて、夢とともに不安を、生とともに死を、愛とともに憎悪を、希望とともに絶望を人間の運命とするのであろうか。

この悲痛な問に答える声はない。そのために精霊、天国、悪魔というような概念が人間をたぶらかすことになり、そのくせ疑惑と偶然と無常とが依然として人生についてまわる。答を求めようとしてつとめた読書と思索の結果もシェリーを満足させるにはいたらなかつた。彼にわかつているのはただ少年のころ神秘的体験によつて知つた影、いまでは一そう切実に「荘厳なる至上の美」（第六節）として意識されるものが、人間の内部にゆるぎなく宿れば人間は不滅全能のものたりうるということだ。しかしそれが進んで常住しないとすれば、人間自身が美の精神を、暗黒の奴隷状態から世界を解放し、美と善とをもたらすものとして信じ、そのためにおのれの一切の力をささげなければならない。

こうしてシェリーは結びとして「美の精神」の力が彼に精神の平安をあたえることを求めているが、これはそこにねがわくは迷うこともない、疑うこともない心の平静を得たい、またこの平静によつてのみ自己の生活が支えられると感じていたことを示しているように思われる。いいかえれば、彼は自分の思想や行動がキリスト教の教義や道徳と背反したものであり、その故に非難をうけていることを知つている。そのような場合その教義と道徳が正しい真実のものであるとしたらこれ以上彼にとつてたえがたいことはあるまい。彼は罪の意識のなかで安住しうるようなタイプの男ではない。そこで彼はキリスト教及びそれと関連あるものすべてを撃破することに熱中したのだ。そしていま「美の精神」の導入によつて相手をうちくだきえたと感じ、一切の価値の根源をそこにみ、自己がその竪琴であることに満足し、このことに精神の安定点をみいだそうとしているのである。その意味で *Hymn to the Intellectual Beauty* は今後の彼の詩人としての方向を確定したものということができよう。

それでは何故彼はその新しい神を「美」としたのであろうか。この「美」をイデアであるとして、この詩はシェリーに対するプラトニズムの影響が明確化したものだとする考え方が支配的である。しかしこれに真正面から反対する人もある。即ち、プラトンにあつては個々の美から普遍の美へ一歩一歩精神の規律ある向上によつて到達すべきことを説くのに対して、シェリーの場合はその正反対でそ

のような精神の努力なしに突然の啓示として行われ、思考を通じてではなく感覚によつて絶対美に達していると指摘する。もつともな考え方である。少なくともその方が哲学的な厳密さがある。この詩についてあまりプラトニズムをひきあいにだすのは早計のようにも思われる。しかしプラトンと無関係とはいえない。むしろプラトンの思想には縁どおくとも、その著作には縁があつたといつていいのかも知れない。というのは Intellectual Beauty という言葉（標題にだけ用いられていて詩の言葉としてはでていない）は官能美でない美、いわば非感覚美という意味だけでつかわれていて、プラトン的に思惟を通じて到達するという意味ではない。しかし「饗宴（シンポジウム）」にはこの言葉があり、「饗宴」を翻訳したのは一八一八年だが、このころすでによんでいることは明らかだから、wide ocean of intellectual beauty（シェリーの訳語）は彼の記憶のなかにのこつていたのではなかろうか。そしてまた、美は「永遠にしてそれ自身あるもの、滅びのないもの。増大することもなく衰滅することもない。」とか、「至高の美の姿は単純、純粋であり、肉、色彩その他人間に附随する空しいいつわりの姿とまじりあつても汚染されぬ」とかいう言葉もその余韻を彼のなかに残していたのではなかろうか。こういう意味でプラトンと無縁であつたわけではない。プラトンの思想そのものではなくとも、その概念の一つを彼の心の要求に最もふさわしいものとしてとり入れたとみることは必ずしも誤りではあるまい。そのとり入れ方ははなはだ自分勝手であつたようだが、シェリーは前にものべたように依然として「私はなにものも知覚されたものとして以外には存在しないと主張する哲学者たちの結論に同意しないではいられないものの一人である」のだから、こういう取り入れ方をするよりほかはなかつたのであろう。

ところで「美の精神」は人間の外部にあり時おり影をなげかけるものとしてとらえられている。しかしまた彼は次のようなことをかいている。「われわれはわれわれの内部の知的なるもののなかにわれわれのいわば全き自己のミニアチュアをおぼろ気に認める。それはわれわれ自身ではあるが、われわれが非難する一切のものをともなわないものであり、このミニアチュアこそ人間に属するとみとめられるすべてのすぐれた、この上なく美しいものの理念的な原型であり、われわれはわれわれのすべての感覚がこれに帰し、これと類似し照応することを求めるのである。」原型は内部にあるのだ。何故それを外部に設定しようとするのか。もし内部にある原型を拡張し、印づけることができるならば、救いを外部に求めることはいらぬ。しかしこれが不可能なことをシェリーは知つている。人間とその社

会は「この上なく美しいもの」とはおよそ正反対な運命にある。しかもその運命を左右できない。シェリーにとつては自己が左右できないものは自己の所有物ではない。自己に左右できないことが自己の所有物でない最も明らかな証拠なのだ。もはや原型なるものを外部に設定してその反映を自己の内にみることに満足するよりほかはない。「目にみえぬ力」「美の精神」がその場所をあたえられたのである。

シェリーがこの意味でプラトニズムに傾斜しつつあることは認められる。と同時にその二元論がやがて彼を著しくひきつける条件も生れかかつている。たとえば人間について彼は次のように考える。

人間とは高きをあこがれる存在であり、その思想は永遠のなかをさまよう。無常（transcience）と衰滅（decay）とに結びつくことを拒絶し、自己の絶滅（annihilation）を想像することをえず、未来と過去とのみに存在し、いまあるところのものではなく、かつてあつたところのものであり、やがてあるべきところのものである。その真の究極の目的地がなんであるにせよ、人間の内部には無（nothingness）と死滅（dissolution）を敵とする精神が存在する。

これは人間観というよりは、むしろ彼の切実な人間的願望というべきであろう。彼は現実の人間の運命がこれとは全く正反対であり、彼の体験している人生は「暗い涙の谷」であり、人間は無常にさいなまれていることを知つている。無常をのがれがたい人間の宿命とみてそこに諦めを求める心情をもたないかぎり、彼が人間とはかかるものであつてはならない、いやかかるものではないと信じれば、現実とは別な世界、現実が仮りの世界であるのに対して実在する世界、「彩られたヴェール」の背後にある世界を夢みることになるのは自然の成り行きであろう。有限、無常、変化の世界、悪と醜と偽の世界に対して「無限、永遠、不易」の世界、「美と善と真」の世界が求められ、求められるが故に実在しなければならないことになる。しかしそのような世界に入るには、理性を通路とすることはできない。感覚もただその影をみるにとどまる。それらとは別な、それらをこえた道、唯一つのこされた道として、このときシェリーは想像（imagination）にたより、これによつて感覚がかいまみたものを確認するよりほかはない。こうしてやがて「詩は想像の表現である」という「詩の擁護」（*A Defence of Poetry*）における命題が生れ「想像の飛翔」によつて異なつた神、あるいは超絶の実在をみることに

なる。

*

しかしこれは将来のことであり、ここでは *Hymn to the Intellectual Beauty* における新しい展開までにとどめ、一八一六年以後死に至る八年間における「神の問題」については章を改めねばならないであろう。